

平成28年度 県小教研学習指導改善調査【結果分析】第5学年国語

1 調査結果の分析

(1) 資料選択について (①~⑤)

ア 本文と資料を関係付けて読み取る力…①②

①は、【話し合いの様子】を読み、ある立場の子どもの発言と事前に示された資料とを関係付けて読み取る設問である。具体的には、「…例えば、【資料3】を見ると、ほかの学年に比べて、**ア**は一、二年生に好きな人が多く、**イ**は、五、六年生に好きな人が多いのが分かります…」の、**ア**と**イ**に【資料3】(好きな本の種類について)に掲載されている学年と本の種類を手掛かりに、本の種類を推測する設問である。昨年度の結果から、「文の主述をとらえること」が苦手であるという傾向があったため、この設問を出題した。しかしながら、正答率8.9%と極めて低い正答率であった。誤答傾向としては、**ア**を「絵本」、**イ**を「物語」と答えた児童が多かった。誤答の理由は、発言の「好きな人が多く」の文言には着目できたが、「ほかの学年に比べて」の文言に着目できなかったことが考えられる。そのため、資料3の数値を読み、五、六年生の好きな本の種類で好きな人が多い「物語」に着目できたが、「物語」は三、四年生も好きな人が多いという傾向に気付くことができなかった。また、「その他」を選択した児童もいた。今後は、文意を明確にとらえた上で資料を読み、必要な情報を選択する指導が必要である。

②も、同じ力を試す設問である。正答率は、62.4%であった。比較的正確しやすい設問であるが、約4割の児童が誤答している。これは、資料の情報を記号に変換した際に、資料の情報と発言した子どもの名前が混同したことが考えられる。今後は、資料の情報を整理できるよう、メモや書き込みなどをして読む指導が必要である。

イ 資料を読み取る力…③④⑤

③④⑤は、【話し合いの様子】を読み、資料から必要な情報を選択し書き抜く設問である。正答率は、③が69.1%、④が54.6%、⑤が58.0%であった。③は、全問題の中で最も正答率が高い問題であった。表に項目が示されて整理されており、【話し合いの様子】の特定の子どもの発言に着目できれば、必要な情報が特定できるからである。④は、約半分の児童が誤答または無答であった。誤答傾向としては、「夏目さん」とした児童が多かった。誤答の理由は、「自分の体験」の文言には着目できたが、「読書とはちがう」の文言には着目できなかったことが考えられる。この設問は、「賛成する案」－「読書とはちがう自分の体験を入れて説明している」子どもという条件で【話し合いの様子】を再読み、条件に合う子どもを抜き出す思考力・判断力が必要である。⑤も、「ブックトークに賛成」－「解決策を述べている」子どもという条件で【話し合いの様子】を再読み、条件に合う子どもを抜き出す思考力・判断力と反論の文型に合わせて書く表現力が必要な設問である。今後は、設問から条件を適切に読み取り、その条件に合わせて文章や資料から必要な情報を抜き出し、それらの情報を用いて表現させる指導が必要である。

(2) 記述問題について (⑥~⑪)

⑥~⑪は、読み取ったことを基にして、自分の考えを論理的に記述する設問である。指定された文字数に達しないと⑥が誤答、⑦以下がすべて無答となる。昨年度の結果から、「子ど

もたちが適切な文章を書けること」をねらいとして、以下の設問を出題した。

ア 制限時間内に指定された文字数で記述する力…⑥

正答率は、65.5%であった。誤答傾向としては、指定された文字数（340字以上400字以内）で書くことができないことであった。誤答の理由として、「自分の考えを整理したり、文章を組み立てて書いたりすることに慣れていないこと」や「何を書けばいいのか発想することができないこと」が多かった。普段から350字程度を書ききる（視写、日記等含む）活動や表現するための情報を発想する活動を意図的に行う必要がある。

イ 段落を構成する力…⑦

正答率は、52.4%であった。約半数の児童が誤答または無答である。誤答傾向としては、設問⑥でのつまずきや段落分けをしないで書き進めることであった。誤答の理由として、「段落を意識して書く力が弱いこと」が多かった。段落意識を高めるため、説明文の学習で段落の役割を指導したり、モデル文を用い、段落があると内容のまとまりが分かり読みやすいという実感を繰り返しもたせたりする必要がある。

ウ 自分の立場を明確にして記述する力…⑧

正答率は65.5%、誤答率は1.8%であった。誤答率の低さから、組み立て表の文型があることで、それが手本となり書くことができたと推定される。

エ 理由を明確に記述する力…⑨

正答率は57.6%であった。組み立て表の文型を基に書くことができていた。しかし、正答率は低い。「意見」「根拠」「理由」の言葉の意味や使い分けを指導する必要がある。

オ 理由に説得力をもたせて記述する力…⑩

正答率は、44.7%であった。賛成する理由に、体験や予想を加えて説明する設問である。誤答傾向としては、賛成の理由と自身の体験や予想を関係付けて説明することに困難さを感じたことや整合性に自信をもてなかったことが考えられる。また、「※資料や話し合いの言葉を使って書いてもよい」の条件を使わなかったことも考えられる。そのため、理由となる自身の体験を語らせる対話的活動を普段から取り入れることが必要である。

カ とらえた問題点について、自分の考えを記述する力…⑪

正答率は、50.4%であった。賛成した案の問題点をとらえ、それに対する自分の考え（解決策も含む）を書く設問である。モデルを用いた上で「反ばく」表現（反論の反論）を理解させ、その効果を考えさせる指導をするなど、「反ばく」表現を段階的に指導することで説得力のある文章を書く力を高めていく。

2 今後、重点的に指導してほしい活動

(1) 国語科の学習で

- モデル文を用いて「反ばく」表現を理解させ、その効果を考えさせること。
- 「意見」「根拠」「理由」等の国語科で用いる用語の意味や使い分け方を学ぶこと。
- 350字程度の文章を書ききる力を付ける活動を継続すること。

(2) 他教科や総合的な学習の時間で

- 資料にメモや書き込みなどをして、自分にとっての必要性の軽重をつけて読むこと。
- 資料や体験から情報を取り出し、それらをまとまりで区切って文章に書かせること。